

## 協同学習を取り入れた中学校英語科の授業改善

研究担当者：江利川春雄（教育学部・代表）、大野 傑（附属中学校）、  
高瀬 麻美子（附属中学校）、元岡 未薫（附属中学校）+大学院生3名

### 1. 本研究の意義と目的

協同学習(collaborative learning)は、次期学習指導要領に本格導入される「主体的・対話的で深い学び」であるアクティブ・ラーニング(AL)の一種であり、ALの中でも最も質の高い学びを全員にもたらすと思われる。協同学習とは「少人数集団で自分と仲間の学びを最大限に高め合い、全員の学力と人間関係力を育て合う教育の原理と方法」(江利川春雄編著『協同学習を取り入れた英語授業のすすめ』大修館書店、2012)と定義できる。

その協同学習を中学校英語科の授業に取り入れる際の理論的・実践的な諸課題について、私たちは研究を継続的に進めてきた。本研究代表者である江利川は、佐藤学(学習院大学教授)が主催する「学びの共同体」研究会のスーパーバイザーとして、年間50を越す学校訪問や教員研修等での講師・助言者として協同学習の普及に尽力している。

それらを踏まえると、現状は以下の3点に集約できよう。

①文科省が新学習指導要領で「主体的・対話的で深い学び」を打ち出したこともあり、学校現場では協同学習に対する関心が極めて高い。

②しかし、伝統的な教師主導/生徒受動による講義型・一斉型の授業スタイルを、生徒主体の協同的な学び合い重視に転換させることは容易ではない。

③その最大の原因は、協同学習に対する経験不足ゆえの不安であり、実践事例の少なさからの授業法獲得への困難さである。教員を研修できる指導者も著しく不足している。

こうした現状を踏まえて、本研究チームは、希望と使命感をもって、中学校における協同的な学びの実現に向けて努力を重ねてきた。以下に、和歌山大学教育学部附属中学校英語科との連携事業に関連した活動の概要を時系列的に報告し、得られた知見および課題について述べたい。

### 2. 活動の概要

*\*研究代表者による当該テーマに関する学校訪問指導・講演等は年間50件を越すため、主なものとどめた。*

- 6月29日 附属中学校で大野傑教諭の研究授業(1年生英語)を実施し、検討会を開催した。さらに、全体会での藤井英之先生と江利川春雄による協同学習の実践法に関する報告および対談を行った(県内外からの参加者多数)。

- 7月14日 岡山市で開催された「グローバル高専事業講演会」において、中国四国地区の高等専門学校の教員を対象に、江利川春雄が「主体的な学びを育む協同学習の実践法」と題した講演・ワークショップを行った。
- 8月7日 大阪大学で開催された「教師のための英語リフレッシュ講座」で、江利川春雄が「主体的な学びを育む協同学習の実施法」と題した講演・ワークショップを行った。
- 7月30日 大阪府田尻町の「平成30年度夏季教職員研修会」で、江利川春雄が「主体的・対話的で深い学びに向けた授業づくり」と題した講演・ワークショップを行った。
- 8月23日 神戸市の兵庫県民会館で開催された「兵庫県英語教育推進リーダー研修会」で、江利川春雄が「主体的な英語学習者を育てる協同学習の進め方」と題した講演・ワークショップを行った。
- 8月27日 和歌山県田辺市東部公民館で開催された西牟婁中学校英語研究会で、江利川春雄が「生徒の主体性を育む協同的な英語授業法」と題した講演・ワークショップを行った。
- 10月15日 鳥取市の県教育センターで開催された鳥取県教職員研修・中学英語の部で、江利川春雄が「主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくり：協同的な学び合いをとおして」と題した講演・ワークショップを行った。
- 10月22日 兵庫県立教育研修所で開催された「英語科授業づくり充実講座」で、江利川春雄が「主体的・対話的で深い学びを実現する英語授業づくり：「話すこと」を中心に」と題した講演・ワークショップを行った。
- 11月2日 和歌山大学教育学部で、協同学習を取り入れた中学校英語科の授業改善に関する研究会を開催した。報告者：元岡未薫（附属中）、大野傑（附属中）、高瀬麻美子（附属中）。討論参加者：江利川春雄（教育学部・研究代表）、大学院生・学部生5名。
- 12月21日 大阪府阪南市の貝掛中学校で開催された「阪南市教育フォーラム」（市内幼・小・中の全教員約350人対象）で、江利川春雄が「子どもが主体的・対話的に深く学ぶ授業づくり」と題した講演を行った。

### 3. 考察と課題

2017年3月に告示された新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」（アクティブ・ラーニングの視点）が、授業改革の切り札として盛り込まれた。学習指導要領において、学習すべき内容にとどまらず、教え方／学び方にまでこれほど踏み込んだ例は過去になかったといえよう。

こうした政策の下で、私たちが研究主題としている協同学習の役割が一段と大きくなっている。つまり、教師主導のチョークとトークによる昭和的な講義型の受動的（passive）な授業スタイルから、学習者同士が協働しながら（collaborative）、主体的かつ能動的（active）に学修を行っていく協同学習へと、授業スタイルを転換させる必要が、急務となっているのである。

協同学習が求められる背景には、学力観の変化がある。子どもたちの多くがスマートフォンなどのICT機器を手にする知識基盤社会においては、学校教育において育成すべき資質・能力（competency）も、従来からの①何を知っているか、何ができるか（個別の知識・技能）のみならず、②知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等）や、さらには③どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（主体性・多様性・協働性、学びに向かう力、人間性等）などがますます重要になっているのである。

英語科ではペアワークやグループワークを取り入れた授業も見られるものの、伝統的な講義スタイルに慣れ親しんだ教師にとって、協同学習への転換は容易ではない。一部には、机を合わせてグループにするといった「形」のみを真似て、結果的に授業の質を低下させてしまう事例も見られる。

重要なことは、「学習者同士が関わり合い、高め合う必然性」をいかに組み込むかであり、1+1+1+1=4ではなく5にも10にもなるグループダイナミクスをいかに引き出すかである。ペアやグループという物理的形式（ハードウェア）の内部に、生徒同士の「関わり合う関係」と「学びのワクワク・ドキドキ感」いうソフトウェアをインストールすることで初めて協同的な学びが作動するのである。

そのためには、お互いの意見を聴き合い、「ねえ教えて」と気軽に言えて、間違いを楽しめるような（enjoy making mistakes）グループ内の信頼関係を形成することが重要である。その土台作りとして、チームビルディング活動による信頼醸成が不可欠である。

協同学習は単なる授業の方法・技術ではなく、一人ひとりの違いを尊重し、助け合い、高め合う「協働」「平等」「民主主義」の理念を内包している。そうした理念を折り込んだ「教育の目的」、それを支える「良質の教材」と一体となって初めて、アクティブ・ラーニングが威力を発揮するのである。

#### 【協同学習成功への留意事項】

- ・まず関係性（つながり・信頼・共感）の構築=コミュニケーションの土壌づくり
- ・聴き合える協同的な集団づくり

- ・ 主役は生徒たち。 舞台裏で支える教師=脚本家+演出家
- ・ 徐々に速度・レベルを上げる
- ・ 平常授業による OJT (On the Job Training)
- ・ 教員生活を楽しむための授業改革 (改革は教師ライフ充実のため)
  - ・ 協同学習の取り組み・熟練度に教科間・教員間の温度差=当然
  - ・ 他教科・同僚から学び合おう
  - ・ 他校の実践から学ぼう→参観・書籍・サイト情報

### 【教師のためのワンポイント集】

- ・ めざそう「自習のできるクラス」(教師はあえて姿を消す)
- ・ 「うちの子は無理」は禁句=信頼する
- ・ ほめる=自尊感情を高める
- ・ 「わくわく・どきどき・ハイレベル」の目標設定 (易しすぎると失敗する)
- ・ 生徒が自分で動ける手順を明記
- ・ 教師の発話は最小限、声も最小 (しっとりとした学びの前提)
- ・ プリント等は生徒に取りに来させる (あらゆる機会に主体性を)
- ・ 家庭学習を前提にした授業 (自学自習の奨励)
- ・ 英語では共有の課題としての基本事項の反復練習も大切